

Title	Mystery Plays の Mary Magdalene
Author(s)	宮川, 朝子
Citation	Osaka Literary Review. 11 P.46-P.55
Issue Date	1972-10-25
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25704
DOI	10.18910/25704
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

Mystery Plays の Mary Magdalene

宮 川 朝 子

サイモンを訪れたイエスの為に、そのからだに一人の女性が香油をかけてやり、その後、イエスの弟子のユダが主人を権力者達に売ったという話が聖書で語られている。聖書では、弟子達による解釈は必ずしも同一ではないけれども、イエスに香油をかけたのはメアリー・マグダリーニであるという解釈は⁽¹⁾既に、伝統的一般的となっている。又、高価な香油をむざむざと流させてしまったと考えて、ユダが腹を立てて、イエスを売ったのだという考え方も、⁽²⁾すべての弟子達の間で認められていた訳ではないが、これも殆んど伝統的解釈となっている。The Chester Plays の *Christ's Visit to Simon the Leper* はこの解釈を基点としている。

サイモンの家をイエスが訪れてくれたというので、みんな、晴々として喜びを語る。メアリー・マグダリーニも心からなる喜びで迎える。

Welcome, my louely lord of leele !
welcome, my hart ! welcome, my heale !
welcome, all my world(e)s weale,
my boote and all my blisse !
from the, lord, may I not conceale
my fylth and my fault(e)s feale.
forgeue me that my flesh, so frayle,
to thee hath done amisse !

Oyntment here I haue ready
to anoynt thy swet body ;
though I be wretched and vnworthy,
wayve me not from thy wonne !
full of synne and sorrow am I,

but therefore, lord, I am sorry ;
 amend me through thy great mercy,
 that make to thee my mone !⁽³⁾

こうして彼女は汚れた身であった自分がイエスによって救われた人間であることを自覚し、その自覚の為に、イエスを迎える喜びは一層深いもの、真実なものとして語られる。‘though I be wretched and unworthy’⁽⁴⁾という言葉に彼女の悔俊者としての姿勢がうかがわれる。

一方、ユダはイエスが高価な香油を彼女にかけて貰っていたことを後々までよく覚えていて、勿体ないことをしたものだ、あれを高く売って、そのお金を自分のふところに入れたかったと齒がみする。イエスはあの香油で頭をぬぐったが、高価な香油が無駄に流れてしまったのだと思うと、口惜しくてならない。彼は遂に権力者達にイエスを売って、その代金を手に入れる。メアリー・マグダリーニの悔俊者としての生き方とは対照的に、実利主義者としてのユダの生き方がここにはっきりと示されている。メアリー・マグダリーニに罪人としての自覚から発した、信仰者の姿がうかがえるとすれば、ユダはそれに対比して、この世での諸々の欲望に身を焦がす我々人間の別の一面を、ここに具現しているようである。

メアリー・マグダリーニは以後、ひたすら信仰に生きるが、その情熱の心情は、イエスの死と復活という事態に際して絶頂となる。Ludas Coventry Cycle の中の *The Resurrection* とそれに続く一連の作品、*The Announcement to the Three Maries* 及び、*The Appearance to Mary Magdalene* にはそれが強烈に表現されている。たとえば、この *The Appearance to Mary Magdalene* の中で次の場面が見られる。

イエスは十字架にかけられて死んだ後、永遠に甦る為に墓から姿を消したのだが、彼女はそのことを知らないで、ただ一途にイエスのなきがらを探し求めて涙を流す。おろおろと泣き叫びながら、あちこちと探し、イエスを尋ねて廻る。その叫び声は悲痛である。

Ffor hertyly Sorwe myn herte doth breke
 with wepyng terys I wasch my face

Mystery Plays の Mary Magdalene

Alas ffor sorwe I may not speke
my lorde is gon þat here-inne wase
Myn owyn dere lorde and kyng of gras
þat vij develys ffro me dyd take
I kan nat se hym Alas Alas
he is stolyn away owt of þis laké.⁽⁵⁾

ここで彼女の悔俊者としての純粋な美しさが余す所なく描かれる。自分を罪から救い、身をもって、その罪を贖ってくれたイエスは彼女にとっては今や絶対者であったのだ。

甦ったイエスは先ず、彼女に呼びかける。⁽⁶⁾ その呼び声を聞いて、探し求めたイエスの復活をここに確認することのできた彼女の喜びは、一挙に何かが爆発するような勢いである。あれほど悲しみ嘆いた彼女の心は喜びに満ちている。そして情熱のおもむく儘に喜びを語る。

how myght I more gretter joye haue
than se þat lorde with opyn syght
the whiche my sowle from synne to saue
From develys sefne he made me qwyght.

There kan no tounge my joye expres
now I haue seyn my lorde on lyve
to my bretheryn I wyl me dresse
and telle to hem "A-non ryght be-lyve
With opyn speche I xal me shryve
and telle to hem with wurdys pleyn
how þat cryst ffrom deth to lyve
to endles blis is resyn Ageyn.⁽⁷⁾

イエスを求める故に、イエスを失った悲しみは大きく、又、復活を知った喜びは大きい。彼女の激しい感情の起伏がこうしてダイナミックにとらえられる。

更に、The Towneley Plays の *Thomas of India* の中では、この情熱は単にイエスとの関係に止まらないで、より大いなるものとして変容して行く。即ち、先に、イエスを売ったユダとの対照において、メアリー・マグダリーニの信仰心が描かれているチェスターの *Christ's Visit to Simon*

the Leper について述べたが、タウンリーになると、彼女は単に世俗に生きる人々との対照においてとらえられるばかりでなく、世俗の人々へ自らの信仰を分け与えようと働きかけ、導く役目をも果して行くようである。人々の心の中にある世俗性、あるいは世俗への願望と、もう一つ別の世界、つまり、信仰へ向おうとする願望、この二つの要素に橋渡しをして、世俗へと走り出そうとする心を引き留めて、信仰への道へ引き返すよう、人々を導く役目をこの女性が果しているように思われる。彼女は単に自己のうちにおいてのみ、信仰に燃えるのではなくて、その熱い信仰心がほとぼしり出て、他の信仰薄い人々を動かし、呼び返す力を持っているのである。

彼女はイエスの復活をかったの弟子たちに報告する。しかし彼等は一言のもとにその報告を否定する。⁽⁸⁾ あれほど、手にも足にも腹部にも血を流して苦しんで死んだイエスの甦る筈がないと彼等は思う。女なんて、見た目には美しくても、中の芯の腐っているりんごのようなものだ、その女のいうことなんて、とても信じられはしないと彼等はいう。彼女は彼等のどんな激しい罵りにも屈せず、一生懸命それに抗議する。パウルスはイエスの死に際して寄せた悲しみを胸のうちに呼び起し、それを言葉にあらわしてみる。彼はかつて、信仰者たることを主の前で誓ったものである。それでも今は主の甦りを信じられない。彼等弟子たちはとっくに主を見捨ててしまっていたのであるから。この、主を見捨てた弟子たちに、火とほとぼしる信仰心に支えられて、主を信じてくれと訴えるのは、他ならぬメアリー・マグダリーニなのである。主を思う熱い涙に溢れつつ、弟子たちのひどい言葉にも動じぬ心が、かつての主の第一の弟子であった彼等を今は、ひたすら導いて行くのである。

paulus. Therfor trast we not trystely,

Bot if we sagh it witterly

Then wold we trastly trow;

In womans saw affy we noght,

ffor thay ar fekill in word and thocht,

Mystery Plays の Mary Magdalene

This make I myne avowe.

Maria magdalene. As be I lowsid of my care,

It is as trew as ye stand thare,

By hym that is my brothere.

petrus. I dar lay my heede to wed,

Or that we go vntill oure bed

That we shall here anothere.

paulus. If it be sothe that we here say,

Or this be the thrid day

The sothe then mon we se.

Maria magdalene. Bot it be sothe to trow,

As ye mon here, els pray I you

ffor fals that ye hold me. ⁽⁹⁾

こうして彼女は自らが一人、信仰者であることに終わらないで、人々をもイエスに近づけようとする、いわば、人々とイエスとの間に立つ存在として描かれていることが頷ける。

さて、以上のような信仰者という正当的役柄の上に、市井の人間としての独特の魅力が加えられて、Mystery Plays 中のメアリー・マグダリーニは一層生命に溢れた人物像として表現されて行くのである。Mystery Plays は実に庶民の信仰の所産でもあれば、娯楽の対象でもあったのだが、この女性には、当時の庶民の姿そのものが如実に写し出されているのである。彼女は主の受難に際しては、自分達の仲間の一人に寄せるとでもいいたい、実に素朴な嘆きや悲しみを寄せている。お上品ぶった態度や、観念論的な言動は少しもない。イエスが甦ったと知れば、たちまち喜びの声をあげる。その言動には深窓の女性にはとても見られない、素朴で豊かな感情がいっぱいである。又、彼女の心はイエスに対してのみ向けられているのではなく、極く普通の人間として、肉身や周囲の人々に豊かな感情を注ぐのだが、その有様を見ていると、聖書を拠点としながらも、聖書をはみ出した、Mystery Plays 独特の女性が誕生しているのだということがわかるのである。聖書を抜け出して、中世の庶民的女性になりきった、

Mystery Plays ならではの女性像がうかがわれるのである。即ち、彼女は清らかな信仰者として理想化された存在であると同時に、日頃、どこにでも見かける 現実的存在としての面を合わせ持っているのである。そこで、これまでは信仰者としての面に焦点を合わせて来たので、以下はその別の面に注目したい。

イエスは死後三日経って復活したのだが、その間、メアリー・マグダリーニはイエスの為に泣いた。一つには、それが罪を赦されて信仰に入ったものの涙であることは既に述べた通りである。けれども、涙の意味はそれだけであろうか。Ludas Coventry の *The Resurrection* では、イエスの死に際し彼女は真実、自分の罪を悔い、救いの主であるイエスの為に祈ったが、それは聖書の精神の、いわば、正当的解釈であり、従って、チェスターやヨーク、タウンリーの各サイクルでも、この解釈は勿論、採用されている。しかし、タウンリーの場合を見ると、彼女は純粋に悔悟者としての涙を流しながらも、イエスの肉の痛みそのものの為にも泣いている。釘で打たれ、切裂かれた肉体はどんなに痛かったろう、どんなに苦しかったろうと、そのことを思っ涙にくれる。

Alas, what shall now worth on me?
 My catyf hart wyll breke in thre
 when that I thynk on that ilk bodye
 how it was spylt;
 Through feete and handys nalyd was he
 Withoutten gylt.⁽¹⁰⁾

更に彼女は次のように嘆く。

withoutten gylt then was he tayn,
 That lufly lord, thay haue hym slayn,
 And tryspas dyd he neuer nane,
 Ne yit no mys
 It was my gylt he was fortayn,
 And nothing his.

how myght I, bot I lufyd that swete

That for me suffred woundys wete,
Sythen to be grafen vnder the grete,
Sich kyndnes kythe;
Ther is nothyng till that we mete⁽¹¹⁾
may make me blythe.

こうして彼女の悲しみは深まるが、その原因は決して単純に、信仰心によるものというように、一色に塗り込められるものではないのである。しかし、タウンリーよりは、おそらくはかなり早い時期に上演されたチェスターやヨーク・サイクルでは、彼女の悲しみはむしろ、単に信仰の問題と結びつけられているようである。というよりは、涙の意味は深くは尋ねられないで、チェスターの場合にその例を見て来たように、イエスと悔俊者としてのメアリー・マグダリーニとの信仰の上の関係を追うことに懸命なようである。

ビザンツ時代のイエスは恐ろしい、冷厳な姿としてとらえられていたが、やがて、聖フランシスコ以来、イエスは我々と同じ人間として、悩み苦しむ者であると解釈されるに至り、そのことは以後のキリスト教に根本的な解釈の相違を与えた。この点を考慮にいれてみると、初期に上演されたチェスターやヨーク・サイクルがイエスやメアリー・マグダリーニをいわば図式的にとらえ、後期に上演されたタウンリー・サイクルでは、イエスの肉の痛みを声をあげてメアリー・マグダリーニが嘆き悲しんでいる、その姿との相違については自ずから肯定できるものがあるであろう。

所で、彼女はイエスを信じて貰おうと人々に訴えかける橋渡しの役目を果していることを既に述べたが、彼女は又、普遍的人間愛を人々の側からイエスに訴えて、その愛を施してくれるよう、イエスへ働きかけもする、いわば、先述とは逆な意味での橋渡しをする女性でもあるようだ。市井の人間の一人として、誰もが持っている愛や嘆きを訴えてイエスにきいて貰い、それを受止めたイエスがその愛を人々に施してくれるよう彼女は働きかけるのである。

Ludas Coventry Cycle の *The Raising of Lazarus* では、ラザルスが病

気になって、マルタとメアリー・マグダリーニの二人の姉妹は嘆き悲しむ。間もなくラザルスは死んで行き、二人の姉妹は嘆きを交互に語る。肉親を失って、彼女達は何によっても慰められようもなく、涙にくれるばかりである。

Alas dere systyr I cannot telle
 pe best comforte pat I can sey
 but sum man do us sle and qwelle
 lete us ly down by hym and dey
 Alas why went he alone away
 If we had deyd with hym Also
 than had oure care all turnyd to pley
 ther now all joye is turnyd to woo. ⁽¹²⁾

ひとが彼女を慰めて、これも神の意志であるから神に従わなくてはならないと諭しても、彼女には兄の墓のそばを離れるのは辛い仕事であった。肉親を失った悲しみは、その極点にあつては、もはや耐えられるものではなく、マルタと二人で彼女は心のままをイエスに訴える。彼女たちの悲しみは余りに深くていやす術を知らず、ただ、イエスに泣いて訴えることができるだけであった。ただ、すがることができるだけであった。そして、その彼女たちの嘆きをきいて、イエスも共に、ただ涙したのである。

A Souereyn lord and mayster dere
 had 3e with us ben in presens
 Than had my brother on lyue ben here
 nat ded but qwyk pat now is hens
 Ageyn deth is no resystens
 Alas myn hert is woundyrly wo
 Whan pat I thynke of his Absens
 pat 3e 3our-self in herte lovyd so. ⁽¹³⁾

彼女たちの訴えに対して、イエスは愛情をこめて語りかける。

3owre grett wepynge doth me constreyne
 Ffor my good ffriend to wepe also
 I can not me for wo restreyn
 but I must wepe lyke as 3e do. ⁽¹⁴⁾

自分の友でもあったラザルスの死は自分にとっても大きな悲しみであり、お前たちの深い悲しみを慰める術を自分は知らない、ただ、共に泣き共に悲しむだけであると彼はいう。イエスはやがてラザルスの墓に行き、神の意志を示すためにラザルスを甦らせる。そして次のようにいう。

Now I haue shewyd in opyn syght
of my godhed þe gret glorye
to-ward my passyon I wyl me dyght
the tyme is nere þat I must deye
Ffor all mankynde his sowle to bye
A crowne of thorn xal perchyn myn brayn
and on þe mont of caluarie
Vpon a cros I xal be slayn.⁽¹⁵⁾

ラザルスの命を甦らせた後で、イエスがこうして語るのは非常に象徴的である。すべての人類の罪を贖うべく、やがてイエスがはりつけに会う、そのことの予告だからである。けれども、振り返ってみれば、あの熱烈な信仰心を持っているというだけで、他にはこれといって取上げるべき何物も持たないマルタとメアリー・マグダリーニが一心にイエスに祈った、そのひたむきで豊かな愛情が最初にあったことを彼女たちの為に思い出したい。肉親の死に際しては、悲しみを押えかねてイエスにすがる、人間の持つ愛の悲しみをイエスに受止めて貰おうと訴える役目を果している。

以上、様々な場面を通して描かれているのは、まぎれもない、生きた一人の女性の姿であって、少しも図式的でもなければ、偽善者的でもない。悲しい時も嬉しい時も全身全霊で泣き、喜ぶのであり、その声までが聞こえて来そうな、その姿が如実に描かれているのである。こうして、ひとたび、我々自身が中世世界に歩み寄った上で眺めると、Mystery Plays は聖書の教えをあらわさなければならないという制約のもとにありながら、そこに躍動している一人の女性のダイナミックな精神のあることを読み取ることができるのである。

注

- (1) Matthew XXVI : 6—7, Mark XIV:3, Johon XII : 3
- (2) Matthew XXVI : 8—9, 14—16, Luke XXII : 3—6, John XII : 4—6.
- (3) *Christ's Visit to Simon the Leper* in the Chester Plays, E. E. T. S. ll.41—48.
- (4) Eleanor Prosser : *Drama and Religion in the English Mystery Plays*, Stanford University Press, 1966, p.113.
- (5) *The Appearance to Mary Magdalen* in Ludas Coventriae or The Plaie called Corpus Christi, E. E. F. S. ll. 1—8.
- (6) Matthew XXVIII : 1—10, Mark XVI : 9—11, Luke XXIV : 1—12, John XX : 11—18.
- (7) Op. cit., ll. 74—85.
- (8) (6)を参照。
- (9) *Thomas of India* in the Towneley Plays, E. E. T. S. ll. 47—64.
- (10) *The Resurrection of the Lord* in the Towneley Plays, E. E. T. S. ll. 412—417.
- (11) Ibid. ll.418—429.
- (12) *The Raisnig of Lazarus* in Ludas Coventriae or The Plaie called Corpus Christi, E. E. T. S. ll. 1 21—128.
- (13) Ibid. ll. 353—360.
- (14) Ibid. ll. 369—372.
- (15) Ibid. ll. 449—456.